**屋久島の農業**

古い屋久島のことわざに「海に十日、里に十日、山に十日」というものがあります。島の人々は海で漁をし、里で農作業をし、山で狩りや採集をます。ポンカン(*Citrus poonensis*)とタンカン(*Citrus tankan*)は島の主要な農産物です。

*サツマイモ農場*

地元で*からいも*と呼ばれサツマイモは、気候や地形が稲作に不向きなことが主な理由で、屋久島の主要な農産物の一つとなっています。サツマイモは中心的な作物であるだけでなく、地元の*焼酎*の主原料でもあります。島の醸造所では、この蒸留酒がどのように作られるかを紹介するツアーを提供しています。

*果樹園*

*ポンカン*は甘く、皮をむくのも簡単です。*ポンカン*の栽培は、1924年に、当時屋久島南部の下屋久村の村長であった黒葛原兼成（1868–1951年）が、島の農産業を活性化させるために台湾から苗木300本を取り寄せて植えたときから始まりました。十年が過ぎ、*ポンカン*の栽培は日本で初めて成功していました。さらに甘く、果汁の多い、*ポンカン*とネーブルオレンジの交配種である*タンカン*は、1970年頃に屋久島に導入されました。

 ポンカンやタンカンは、麦生、原、尾之間、平内、また永田といった、温暖な島の南部で主に栽培されています。昼夜の大きな温度差と、19から20℃という年間平均気温が、これらの品種に適した条件を提供しています。屋久島は現在、この両品種の代表的な生産地で、2019年には299トンの*ポンカン*と715トンの*タンカン*を生産しました。*ポンカン*は十二月から一月にかけて収穫され、一方*タンカン*は二月から三月にかけて収穫されます。

*十五夜綱引き祭り: 一湊の農業対漁業大会*

屋久島の各集落は、太陰暦の八月15日の中秋の名月（*ジュウゴヤ*）の夜に、十五夜綱引き祭りを開催します。この綱は龍神を表すと言われ、またこの綱引きは「勝負」ではなく、心身を清めるための儀式なのです。この祭りの背景にある象徴的意味は集落ごとに異なります。一湊のそれは、綱引きが豊漁と田畑や果樹園の豊作を祈願するために開催されるという点で特徴的です。

 祭りの朝、村の代表者たちはつるやススキを切り、綱を作ります。この綱の太さは30センチほど、長さは70メートルほどあります。月が昇ると、中秋の名月に綱を奉納する儀式が執り行われます。参加者は年齢を問わず二つのチーム―片方は豊作を、もう片方は豊漁を表す―を作り、繰り返される同じ旋律に合わせて叙事詩を歌いながら綱を交互にゆっくりと引きます。満月が空高く昇ると、綱引き大会が始まります。理論上は、その集落が翌年豊作になるか豊漁になるかをこの勝負が決めると言われていますが、一湊では結果はいつも引き分けに終わります。綱は切れた場合には土俵の輪として使われ、子供や若者たちが相撲をとって、集落の人々の心身の健康を祈願します。